袋井市教育委員会 会議録（要旨）

会　議　名	平成29年12月 袋井市教育委員会　定例会
招集日時	平成29年12月26日（火）午後１時30分
会議時間	午後１時30分から午後３時58分まで（２時間28分）
場　　所	袋井市総合センター３階Ａ会議室
出　席　者	鈴木典夫　教育長 前嶋康枝　委員 上原富夫　委員 豊田君子　委員 大谷純應　委員 （計：５人）
欠　席　者	無し
傍　聴　者	無し
当局出席者	大河原幸夫　教育部長 早川俊之　教育企画課長 川村佳典　おいしい給食課長 乗松里好　すこやか子ども課長 鴻野元希　育ちの森所長 平野邦孝　学校教育課長 杉山明子　生涯学習課長 山本義孝　袋井図書館長 大庭尚文　教育企画課幼小中一貫教育推進室長 伊藤千ひろ　教育企画課総務企画係長 （合計：15人）
会議に付した事件	別紙「平成29年12月 袋井市教育委員会定例会 議事日程」のとおり

平成 29 年 12 月　袋井市教育委員会定例会　日程

日時：平成 29 年 12 月 26 日（火）午後１時 30 分開会

場所：袋井市総合センター３階Ａ会議室

会　　議　　日　　程

日程第１　開　会

日程第２　会議録署名委員の指名

日程第３　会議録の承認

日程第４　教育長報告

日程第５　教育部月例事業報告

日程第６　議　事（会議に付すべき事件）

（１）議決事項

議第 19 号　　袋井市立公民館条例施行規則の廃止について

（２）協議事項

協第 55 号　　袋井市の幼小中一貫教育の目標と評価指標（案）について

協第 56 号　　幼小中一貫教育の推進（教師の特性や専門性を活かした指導）について

協第 57 号　　平成 30 年度 袋井市立図書館の臨時開館、特別休館及び振替休館について

（３）報告事項

報第 120 号　　寄附品　絵本「活人剣の物語」等の受納について

報第 121 号　　袋井駅南地区まちづくり事業メディカル地区における保育所の進出について

報第 122 号　　「英検チャレンジ」事業の開催状況について

報第 123 号　　岩沼市玉浦中学校と周南中学校との交流について

報第 124 号　　公益信託西川金一・ゆり子図書助成基金による寄贈品の受納について

報第 125 号　　袋井市立公民館条例の廃止について

日程第７　その他

（１）連絡事項

ア　　中部学校給食センター給食展の開催について

イ　　第３回広島平和記念式典中学生派遣報告文集

ウ　　袋井市立図書館だより「ふくぶっく」平成 30 年１月号

（２）次回定例会等の予定について

１月定例教育委員会

１月 25 日（木）午後１時 30 分～　袋井市役所 301 会議室

（３）その他

市議会民生文教委員会委員と教育委員との意見交換会

１月 18 日（木）午前９時～　袋井市役所第２委員会室

日程第８　閉　会

（午後３時 58 分閉会）

平成 29 年 12 月 袋井市教育委員会定例会 会議録（要旨）

1　開会

●鈴木教育長

それでは、ただ今から、平成 29 年 12 月袋井市教育委員会定例会を開会させていただきます。

2　会議録署名委員の指名

●鈴木教育長

袋井市教育委員会会議規則第 16 条第２項の規定に基づき、豊田君子委員 及び 上原富夫委員 を指名いたします。

3　会議録の承認

4　教育長の報告

●主な報告事項

・市議会（11 月 28 日～12 月 21 日）

・第１回幼小中一貫教育推進委員会（12 月 15 日）

・第４回社会教育委員会（12 月 20 日）

その他は資料のとおり

5　教育部月例事業報告

●教育企画課

・第１回幼小中一貫教育推進委員会（12 月 15 日）

●おいしい給食課

・第２回食物アレルギー対応委員会（１月 11 日）

・中部学校給食センター給食展（１月 20 日）

●学校教育課

・授業改善推進研修会（12 月 11 日）

●生涯学習課

・袋井南小・袋井南中ﾏｰﾁﾝｸﾞ全国大会激励会（12 月８日）

・第４回社会教育委員会（12 月 20 日）

・県下一斉冬季少年補導（12 月 22 日）

・月見の里学遊館運営協議会（12 月 27 日）

・平成 30 年成人式（１月７日）

［質疑・意見］
なし

6　議事

【議決事項】

（１）議第 19 号　袋井市立公民館条例施行規則の廃止について

●生涯学習課長

来年の４月１日から公民館を廃止し、コミュニティセンターに変わります。11 月市議会で、新たにコミュニティセンター条例の制定と、公民館条例の廃止が 12 月 21 日に議決されました。条例の施行日は平成 30 年４月１日です。これに伴い、袋井市教育委員会が定めている袋井市立公民館条例施行規則を廃止することについて協議いたします。年度末をもって廃止とするものです。本日、報告事項の中に条例の内容についてあげていますので、あわせて報告いたします。

［質疑・意見］
なし

●鈴木教育長

本件は、原案どおり議決いたします。

【協議事項】

（２）協第 55 号　袋井市の幼小中一貫教育の目標と評価指標（案）について

●教育企画課長

幼小中一貫教育の取組の成果と課題を把握し、取組内容や方法を見直して改善につなげていくことを目的とし、毎年度、評価指標に基づく評価・検証を行います。指標と目標値の設定にあたりましては、３つのポイントを押さえて整理しました。１つ目として、幼小中一貫教育が目指すものを明確にするため、小中一貫教育の基本方針で掲げております３つの目標ごとに、指標と目標値を整理しました。２つ目として、今後も継続して測定することができるもの、また、無理なく調査ができるものを選択しました。３つめとして、あまり、指標の数が多いと何を目指そうとしているのかわかりにくくなることもありますので、８つの重点指標と、複数の関連指標に区別することで焦点化いたしました。重点指標につきましては、目標に対する「成果」を直接的に表すもの。そして、関連指標につきましては、目標に対する「成果」を間接的に表せるようなものを選択いたしました。なお、

目標値につきましては、「重点指標」についてのみ設定することとし、平成32年度の全校実施後、３年経過した平成34年度末、平成35年度当初の数値といたしました。この指標案につきましては、12月15日の袋井市幼小中一貫教育推進委員会において協議していただきました。主な意見といたしましては、全体を通して結果指標と行動指標が混在しており、一つ一つの指標の重みが異なっている。ただ、全てを結果指標にすることはできない以上、ある程度意識調査レベルでの指標や行動指標となることはやむを得ないとの御意見をいただきました。「自分によいところがある」という指標については、現状の３割を７割にすることを目標としておりますが、これについては100%を目指してほしいとの意見をいただきました。また、家庭に関する指標がないので入れていただきたいなど、指標の変更に関する意見が５件ありました。これらの評価指標案につきましては、今後、1月の市議会民生文教委員会で御意見をいただいた後修正し、２月に開催予定の第２回袋井市幼小中一貫教育推進委員会に修正案を提案し、また、民生文教委員会にも報告した後、３月末の教育委員会定例会で決定をしていただく予定ございます。

［質疑・意見］

●鈴木教育長

これは、冊子としてどのような形で外へ出て行きますか。

●教育企画課長

冊子とするかどうかは未定ですが、公表いたします。

●鈴木教育長

昨年、小中一貫教育基本方針という冊子ができて、標題はどうなりますか。

●教育企画課長

現在調整中の「幼小中一貫教育の手引き」に加えることなどを考えています。なお、平成32年度からの一貫教育実施としていますが、来年度から各校区で試行されるものもありますので、その際にもこの評価指標を見据えたうえで取り組んでいただけるよう、指標や目標値が決定した際には公表し、広く知らしめてまいります。

●鈴木教育長

スケジュールとしては、今年度中に案がとれるということでいいですか。

●教育企画課長

３月末までに定め、公表し、一貫教育の試行に移っていきたいと考えています。

●鈴木教育長

つまり、昨年でていたのが方針だとすると、今後、実施の手引きや実施計画ができあがる。これには、標準カリキュラムなどが盛り込まれることになるため、来年度当初に全てが完成するということにはならないが、試行が始まるので、目標と評価指標だけは前もって公表していこうという流れとして理解していいですか。

●教育企画課長
　そのような予定で考えています。
●鈴木教育長
　この教育委員会としては、今日御意見をいただいて、最終３月の教育委員会で了解していただければ、公表となる手順です。
●前嶋委員
　幼小中一貫教育推進室からは、何か補足がありますか。
●幼小中一貫教育推進室長
　基本方針を定めるときにいくつか課題がありました。まずは課題を改善するために目標１に４つの重点目標を掲げ、着実に改善を図りたいと考えました。それから、これからの子どもたちには新しい時代を生きるために資質・能力を養う必要があると考えたときに、今、標準カリキュラムの作成をする中で、思考力をつける教育の具体策を検討していますが、それに対応する指標として、考える力がついたかどうかわかる指標として、学力調査のＢ問題を応用力をはかる指標としています。それから、こういった教育現場の取り組みを支え、より充実させる大きな力となる、オール袋井による子育て体制、地域の方々の力をいただきながら、子どもたちを育てる体制を作るというようなことが大切になってきますので、関わる人たちがそういった意識を持って取り組んでいるかということを重点指標の７、８に加えました。
●鈴木教育長
　この中で、推進委員会で意見をいただいて、今後見直す予定の箇所を教えてください。
●幼小中一貫教育推進室長
　既存のアンケートの中から、補完するような項目を拾い出して、関連指標に追加する方向で検討しています。例えば、チャレンジ精神のところには足りないものがありますので、そういった視点で何か加えることのできるアンケートがあるか、また、親と子が一緒になって改善に取り組む方向を確認できるようなアンケートがあるかなど、検討しています。
●上原委員
　目標Ⅰ、目標Ⅱ、目標Ⅲとカテゴリーが分けられてあるが、重要性や緊急性、優劣など順番に関わりがあるのか。
●教育企画課長
　袋井市小中一貫教育基本方針で示した目標Ⅰ～Ⅲをそのままの順番で用いています。
●上原委員
　このできあがった資料を見渡したときに、資料のはじめに掲げられている『夢を抱き、たくましく次の一歩を踏み出す 15 歳（自立した人間として主体的に判断し、多様な人々と協働しながら新たな価値を創造するための基礎的な力を備えた 15 歳）』を育成することが大前提とするのであれば、目標Ⅱの方が目標や指標としてしっくりくる。ここに書かれ

ているように、「自立した人間」や「主体的に判断できる」、「多様な人々と協働できる」基礎的な力が身に付いているような人を育てることの方が、学力調査の結果が上がるよりも重要なことだと考える。

ここに書いてあるように、目標Ⅰには「教育課題を改善する」とあるが、これは袋井市の義務教育が抱えている目の上のたんこぶ的な問題を挙げているのだと思う。目標Ⅱの方は、本来的に 15 歳になっていく過程での子どもたちの姿をどうしたらいいのか、本当の幼小中一貫教育の目標なり評価すべきことなのだろうと思う。こちらの方に、より光を当てた重点指標なりを考えるべきだと思う。そうしてみると、ここにある学力調査について、考える力、思考力を深め、幅広くしていくためにはＢ問題が大変重要だと説明があった。もっと重要なのは、目標Ⅰにある「自分にはよいところがあると答える児童」、「学校が楽しいと答える生徒」、「きまりの必要性に気づかせる取り組みを行っていると答える教職員」が沢山いることの方が、目標Ⅱの重点指標としてふさわしいような気がする。この重点指標５と重点指標１の学力調査については、Ａ問題、Ｂ問題と考えられた上であえて分けて書いてあると思うのだが、いわゆる学力としてとらえ目標Ⅰにくっつけてしまった方がわかりやすいのではないかと考える。同時に、英語検定３級についても、どちらかというと目標Ⅰの範疇に近いのではないかと考える。

最終的に、子どもたちが 15 歳で自分の進路なり、職業なり、目標、希望といったものに具体性を持たせるとか、夢や目標に近づけていく時には、先ほど目標Ⅱのところで申し上げたような事柄を含めた子どもたちの割合が多くなることを期待し、指標として掲げた方がよいのではないかと思う。そういう意味では、目標Ⅰ、目標Ⅱの関連指標の中に大変重要なものも入っているので、目標値を設定することについても改めて考え直した上で、この指標案を再検討していただきたい。

●豊田委員

学力調査が重点指標１にきているが、それがそれほど重要なのかなとどうしても思ってしまう。確かに既存の資料（調査）を使うという考えが最初にあるので、あまり沢山の資料を入れてしまうと、また大変になってしまうと思うということもありますが、せっかく、袋井版学調を小４からやっているので、そういうのも含めてつなげていく。なんとなくこれを見ると、学調だけというイメージがあるが、せっかくやっているので、小４からやっているその子たちの学年がこういう風に伸びていっているよというような“つながりが見える指標”の方がいいのかなと考える。それと関連して、アンケートを見ても、全国学調などの調査に基づいてやっているので、アンケートの内容によって子どもはこういう風に聞かれるとこういう風に答えるけれど、少し言い方を変えるとプラスに考えるっていう傾向がある。例えば、重点指標８「地域の大人に勉強やスポーツを教えてもらったり、一緒に遊んだりすることがある」についてはパーセンテージが低い。袋井にはお祭りがあり、祭りは大人との関連がある。祭りに参加していることも含めれば、必ずこの数字は上がる。

言葉（聞き方）を少し変えただけで、子どもたちは「よくある」に丸を付けるようになると思う。もし、既存の調査を使う以外に、少し言葉を変えることができるのであれば、そうした工夫をすることで数値は上がっているものと考える。質問の言葉ひとつで、数値は変動するように思う。

●教育企画課長

指標の順番については、基本方針の順番で整理いたしました。今一度、考えてみたいと思います。それから、アンケートの取り方については、前回、前々回の定例会でも、この大人との関わりに関するアンケート項目について話題になりました。その折にも、質問の仕方一つで数値がだいぶ変わってくるだろうという御意見がありました。しかしながら、新たなアンケートを増やしていくことは教育現場の負担増にもつながることから、できるだけ避けたいということもございまして、既存の調査を中心に構成しているところです。アンケートを実施する際の質問の仕方に関係してくるのかなとも思います。学校の現場において、聞き方を工夫することができるのかということについては、実際の様子がわからないのでお答えすることができません。いずれにしても、このようなことも含めながら、持ち帰って再度検討したいと思います。

●幼小中一貫教育推進室長

指標については、既存のアンケート項目を中心に洗い出しをしています。その理由は、教育現場への負担に配慮し調査の数を増やしたくないということと、もう一つは、今の袋井市の状態がどのレベルにあるのか他と比較する際には、全国的、全県的に共通した聞き方をしているアンケート調査を活用するのが有効だと考えているからです。また、評価指標については、先ほどからの説明の中で、３つの目標に対して一番関連があるところに入れ込みをしてあります。ただ、一つ一つの指標を見ますと、上原委員の御意見にもありましたが、見方によっては目標Ⅱよりも目標Ⅰに関連する、又は逆に目標Ⅰにも関連するが目標Ⅱにも関係があるのではないかというものも中にはあります。今は、事務局の視点で３つの目標の中で一番関連が強いと思われるところに配置してありますが、今後の作業の中では、目標間をまたいで見ていこうというような設定の仕方も必要なのではないかと考えています。

●鈴木教育長

上原委員の御意見は、簡単にいうと基本方針に縛られなくてもよいのではないかという話だと思う。基本方針で目標Ⅰ、Ⅱ、Ⅲを掲げている。なぜ小中一貫教育をやるのかということを説明する上で、まずは、目標Ⅰとした「教育課題を解決する」ためにやることを挙げているので、確かに優先順位と理解されるのだろうと思う。これから、幼小中一貫教育の推進にあたり、「自立力」と「社会力」を前面に出していったときに、必ずしもそれに縛られる必要はないのではないか。そうすると、色々な形での組み替えができる。例えば、「自立力」と「社会力」を高めますという方針のもとに、自立力」と「社会力」を構成

する項目との関係性を整理し、こういう指標で確認しますといったまとめ方も可能だと考える。ただ、基本方針を受けて、これが実施計画の一部だと理解していただくと、現在案のような整理の仕方になる。重点指標や関連指標の入れ替えについては、先ほど事務局から説明があったように、まだ検討の余地がある。

●大谷委員

確かに、数値化できる指標は、わかりやすいのかもしれない。先ほどの意見にもあったように、「地域の行事に参加する」と尋ねた場合、例えば花火のごみ拾いだったり、防災訓練だったりとか、ほぼ半強制的に参加させるようなものも含まれるのかどうか。おそらく答える子どもの考え方や理解度の違いにより回答に幅が出てくる。このように、アンケートの結果が単純に数値化することが難しいものは、状況が掴みにくいと思う。次に、目標Ⅲに「オール袋井」とある。言葉はよいのだが、意味が理解できていない。確かに、家庭と地域と学校と行政が一体となっているというのはすばらしいことなのだが、重点にしても、関連にしても、この指標を見ただけでは、「オール袋井による子育て充実」とはどういうことなのかわからない。次に、重点指標７「同じ中学校区の教職員が、15 歳の姿を意識し、連携して指導を行っている」とあるが、これは「他の教職員が」ということなのか、「自分自身が」ということなのか、どちらなのか。先生から見て、「他の先生たちと意識を共有してやっていますよ」ということなのか。

●教育企画課長

自分も、他の先生も「15 歳の姿を意識し、連携して指導を行っている」という意味合いである。

●大谷委員

オール袋井というのは、「家庭、地域、学校、行政が一体となった」と書かれているが、現在示されている指標案は、教員と地域に関するものしかなく、家庭や行政に関するものはどこで測るのかわからない。そもそもが、“オール袋井”自体が、何をもってオール袋井と言っているのかがわからない。むしろ、地域に重点を置くべきなのか、先生の連携というものがオール袋井ということなのか、この目標Ⅲについてはわかりにくい。その点、目標ⅠやⅡはわかりやすい。どうも、目標Ⅲについては、わかりにくい。

●教育部長

この評価指標の考え方そのもの、基本的に、どうしてこういうことをやるのかといったところなのですが、幼小中一貫教育をやるという掛け声と目標は、文字化すればいくらでも書けるわけだが、これからやはり市民の皆さん、教職員を含めて、皆さんがイメージできなければいけないとことがある。ただいま様々な御意見をいただいたように、その中で、わかりやすく皆さんに説明する際に、指標や数値、場合よってはイエス、ノーもあると思うが、そういったことで推進状況を皆さんにお知らせしながら取り組んでいくことが大事ではないかということが、事務局の中で話し合われた結果でございます。では、それにふ

さわしい指標はどうかと言われると、これは本当に難しいところがあります。大谷委員が言われるように、目標Ⅲについて、オール袋井というイメージをこの指標だけでみんなが思い浮かべることができるのかというと、それはいささかの疑問がないわけではない。ただ、今の段階では、あまり大きな負担を学校あるいは児童生徒に掛けることなく、何らかの形でこの幼小中一貫教育をスタートしてから当分の間は、この推進を広げていきたい。教育委員会だけがそういうことをやっていればいいということではなくて、そういうところをうまく強調したいなと考えています。

●大谷委員

おっしゃられることは非常によくわかる。むしろ、先生や子どもたちの負担がなるべく軽減されていて、指導に向きやすくなるというのがこれらから求められるところだと思う。これからの検討作業の中で、指標が増えていったり、変わっていったりする中で、聞き取りやアンケートをとる対象がもしかしたら先生や子どもではなくて、家庭だったり、あるいは地域の方になる。地域の方にとって子どもがどう見えるかとか、地域の方にとって学校がどう見えるかとか、確かに保護者の方に「信頼できる先生がいるか」と尋ねる項目はあったが、保護者の方から見て学校はどうかとか、保護者の方から見て地域の子育てはどうかとかといった部分が、徐々にこれから組み込まれてくると、このオール袋井という意味が生きてくるのかなと。地域の方にとって子育てとか、昔みたいな子育てがしにくくなっている世の中なのでしょうけど、地域の方にとって袋井全体で子どもを育てているという意識はどうかというところも、他からも何か借りてくる調査とかもできるかもしれないので。

●教育部長

今おっしゃっていただいたようなことについては、推進委員会の中でも話はございました。今の時点で新しい調査をやるということは考えていませんが、今後、どこかでそういう必要性が生まれて、やるタイミングが出るかなとは考えているところです。

●大谷委員

もちろん、今無理をして調査をしてくださいということではない。無理のないかたちで入っていくというのはよいことだと思う。

●前嶋委員

袋井市が掲げている「一歩踏み出す 15 歳」という姿を意識していきたいと思っています。この袋井市は幼小中一貫教育であり、この「幼」がどこに入っているのかというと、重点 7 ところにある。幼小中が一貫教育をやっていくというのであれば、今「幼」は何をしていけばよいか、「小」が何をしていけばよいか、「中」が何をしていけばよいかということが、この評価指標を見ることでわかるようなものになるといいのではないかと感じる。そうすると、これを活かしていくのか、ただ見るだけで終わるのか、ということが問題であって、これを活かしていくためには、今やるべきことは何かということにつながると思

うわけです。そうすると、学力調査の部分はここでいい、だけども、もっと出てもいいようなものが、「みんなで何かするのが楽しい」とか、「学校の授業がわかる」とか、幼稚園でも「幼稚園楽しいよ」という項目が、うちの子はこれでいいよということにつながるような項目が目標Ⅱのところに出てくることによって、幼も小の低学年でも、中学の１年でも２年でもそれが役立っていく。やっていることがわかるっていうようなことが何か現れたら、今までの既存の資料で十分できるので、そういうようなことが出たらいいなということを感じます。もう一つは、目標Ⅲのところで、同じ中学校区で 15 歳の姿を意識した取り組みを行っているかと尋ねた時に、現状値が 22％と 19％と大きく公表されたときに、先生たちの意識はこの程度だったのかと思われるような数字をわざわざ出す必要があるのかということも思いました。それだったら、幼小中一貫でやるならば、学校評価の中にもこのようなことが出てきたり、子どもの評価、通信簿でも学校が楽しいと思っているとか、そういうような項目があったりすれば、自然にこれがつながっているんじゃないかなと感じるのではないかなと思いました。

先日、中学校に成績をもらいに面談に行った保護者の方から、中学校も変わったねと話がありました。何が変わったのか尋ねると、「三者面談をやったときに、中学校の先生のところにうちの娘が「なんで先生この点数なの？この成績なの？」ってうちの子が聞くんですよ」って言うんですよ。「そしたら先生が「これでもお前、いい方にしてあるんだぞ」って、「成績は悪いけど、提出物はいい。出席も全部できているからこの成績なんだよ。これで満足だろう。お前もっとテスト頑張れ。」って言うやりとりを聞いていて私もなにか恥ずかしいけど、うれしくてたまらなかった」って言うんです。「今まで兄ちゃんやお姉ちゃんの時はそんな会話どころではなかった。黙って、怒られているのを聞くだけで。それが今はそういう会話。だからうちの子、学校が楽しくてしょうがないって。」いう会話につながっていったんです。そう思ったときに、それだったらもう「みんなで何かするのが楽しい」、成績悪くてもこれは丸、っていうような、何か基準が、成績のところは確かに評価はゼロかもしれないけど、そういう前向きな生きる力の方には活きているかなと思ったりしたときに、幼稚園でも元気に行ってくれるよというように、目に見えるものが求められていると、幼も小も中の保護者もこれを見て、15 歳の姿に近づいていることが見えるようになるのではないかなと思いました。

評価指標の設定にあたっては、そういうことを目的にしていないのかもしれませんが、幼小中一貫のあたたかいものが表現できるといいなと感じました。自然に授業に取り組む、怒られるからやるのでなくて、わかるために頑張るんだっていう姿になってくのではないかなと思いました。それと同時に、こういう生徒の割合ってことが出ていますけど、そのためにどのような手立てをしているかとか、どのような場づくりをしているかっていうことも考えていくと、これから先が明るく見えるのではないかと思いました。

●上原委員

大谷さんのお話しを聞いていて、今考えたのですが、教員や地域の人だけでなくて、家庭をどうやって巻き込むかという手法の一つになるのかもしれないのですが、この沢山の項目の中で、児童生徒に聞く項目というのは 11 項目ある。この 11 項目については、子どもに学校で聞いたり、学校でアンケートに記入してもらうパターンだと思うが、将来的には、同じ質問をおうちの方にもぶつけてみることで活かせる手段がでてくるのではないかと考えます。子どもは「学校に行くのが楽しい」もしくは「楽しくない」と思っていると答える。それを脇で見ている親が、本当に楽しいと思っているみたいだとか、いや、つまらないと思っているのかもしれないっていう風に、親が自分の子どもを通して、学校をどう捉えているか、自分の子どものものの考え方をどんな風に理解しているかっていうようなことを深めることが、オール袋井の本当の意味合いになりそうな気はする。いますぐ、この評価指標をつくる上では役立たないかもしれないけども、今後、何年間の間に目標なり評価指標を改良、改善していく上では、一つの重要な資料になりうると思う。アンケート項目を増やすのではなくて、アンケートを親と子どもとダブルでとるという風な方法もおもしろいのではないかと考えました。

●学校教育課長

上原委員からお話しのあったアンケートの件ですが、実は学校現場におきましても子どものアンケートと、その裏に当たる、例えば、「学校が楽しい」っていうことに対しては、「お宅のお子さんは学校へ楽しく通っていますか」というような聞き方をすることで、アンケートの整合性をみています。その中で課題となったのは、親の認識で答えるのではなく、親が子どもに質問して子どもの回答をそのまま記入することも実際にはあるようなので、そういう点でアンケートの取り方としては課題があります。しかしながら、上原委員のおっしゃったような意識をもって、学校でもアンケートの作成、実施にあたっているところです。

●上原委員

課長が言われているようなことは、私も考えました。実際問題としてはあると思いますが、それでもいいと思う。家庭で、「あなた学校が楽しいの？」という話題があること自体が重要なんですよ。だから、それがどれだけ離反していても、家庭での親が子どもに対して、子どもの生活に対してお互いに興味を持ったり、会話を持つことの値打ちの方が高く評価できるのではないかと。そういう道具として活用できそうな気がしますね。

●学校教育課長

そうですね。そこで会話が生まれるということがとても大事なことだなと我々も思っています。

●教育部長

いただいた意見については、大事な視点であると思います。今後の指標の発展性を加味して、今後の研究課題とさせていただきたいと思います。現時点での指標それぞれに、若

干のもやもやしたところがおありなのかなと受けとめておりますので、一つは、それぞれの指標ごとに何でこの指標が、どういう意味を持つのかっていうところが、もう少しわかりやすくなった方がいいのかなということを率直に感じています。できれば、事務局でできる範囲で、この指標の持つ意味みたいなものをコメントを入れることも大事かなと考えています。それから、これも今すぐにはできない話なのですが、指標一つだけをとらえて云々ということではなくて、マトリックスのような感じの要素もこれから考えなければならないのではないかと思います。例えば、「オール袋井」の重点指標８についても、ここで１つの事象だけを捉えるのではなくて、何かこれと関連するものがあれば、これが伸びると子どもはどうなるのっていうところがあると、きっと皆さんにわかりやすく説明ができるのかなと感じますので、その辺を少し工夫、改善できればしていいきたいと思います。

●鈴木教育長

指標については絞り込みをしたい。評価としてはその方が決まってきます。ところが絞りきれなくて、関連指標まで入れると 27 項目。なぜ増えるのかというと、教育委員の皆さんを含め一人ひとりの教育観の違いを全て反映しようとするとどんどん増えていってしまう。これが大事だ、これを大事にしてほしいという皆さんの思いを入れていくと評価指標は増えていってしまう。上原委員が最初に言ったように、優先順位の議論も、これもある意味止めどなくなっていってしまう。教育に対する皆さんの色々な思いをここへ全部集約しようとしたら当然増えていく。優先順位といっても延々と議論が続く。その中で１つの案として出させていただいたのが、このパターンだということです。ただ、これが絶対ではないと思いますし、上原委員がおっしゃるように、学力調査については、ＡＢ一緒と、Ｂを分ける必要があるのかなというところとか、重点目標も含めて若干入替とかをした方がいいのかなと思うところはありますので、今伺ったお話を参考にしながら再検討すべきところはあるなと思いました。特に、目標Ⅲの「オール袋井」のところで、上原委員が数えていただいたときに地域へのアンケートが一つもないんですね。これは技術的に極めて難しい。だから、オール袋井っていうのも、子どもの視点からでしかなかなかアンケートは現実的にはとりにくい。そういう現実的な問題も抱えながら親と学校と家庭の関わりについて、推進委員会でも家庭の関わり、例えば学力問題に関していうと、関連指標の③「家で授業の復習をしている」と答える児童生徒の割合とありますが、これ家庭学習の時間との関連が非常にあるものなのですが、家庭の教育力に関するものが実は、本当は目標Ⅲの方にあってもいいんですよね。そういう点で、少し家庭の関わりみたいなものは指摘も受けてきましたし、弱いところもある。もう一度皆さんに御理解いただきたいのは、教育に対する期待と、幼小中一貫教育の成果を測る指標とが入り交じっている。袋井が幼小中一貫教育をすることでどういう結果を出したいか、そこのところの原点の中である程度これを絞って考えてきた。しかも、わかりやすい、いわゆるエビデンスといったものに対応するものを絞ってきた。必ずしも優先順位をつけている訳ではないですが、重点目標

１、２、３となれば、そういうことになるのかもしれない。そうしたら、もしかしたら目標Ⅰの中の重点目標１、２、３、４、目標Ⅱの中の重点目標１、２とかですね、その方がまだ優先順位は目立たないとすればそういった方法もあるかもしれない。実は 19 の関連指標は、優先順位という点ではかなりバラついているんです。そのバラつきを数字で明確に揺るがないというところを引き出したのが重点目標になんですね。もう、無色透明。これがいいって言えばそりゃあみんないいはずだよね。非行件数や問題行動が減りゃあそりゃいいよね。学力がありゃいいよね。つまり、教育観なんかをちょっと超えたところでみんなが、9 割の人がこれが上がればいいよね、結果出てるよね、っていうようなところで、最大公約数ってうのが当たってる表現かどうかわかりませんが、そういう中で。また、もう１つの視点が、実は私がこだわったのは、実施計画があって、その計画に基づいた指標なんです。実施計画はまだ見せていません。だから、最初に評価指標を作っておいて、今実は何をやるかっていうのはまだないままこの作業をしている。本当は、インプットがあって、つまりこういうことをやればアウトプットとしてこういう結果が出ますねっていうのが成果であり評価指標になるのですが、インプットの具体的な内容が今示せないでこの議論をしている。そこも、実は議論が、つまり何をやるかっていうのが、これをやったらこういう結果が出るでしょうっていう、そのこれをやるっていうのがまだ明確になっていないままでの議論なものですから、これがまだ煮詰まらないところがある。ただ、もう一回見直して、１つはこれば袋井の教育目標ではなくて、幼小中一貫教育の評価指標と成果目標である。一貫教育をすることによってどういう成果を出すかという、ある意味限定されたものになる。そうなるべきだろうと思っている。それ以外は、袋井の教育の指標で判断していく。それともう一つは、このつくりについて、優先順位の議論は少し検討させてください。皆さんの意見については十分受けとめて、事務局と一緒に考えて行きたいと思います。まとめにもなりませんが、そういうように今議論をしている最中でございますので、今後とも御意見をいただく機会がありますのでよろしくお願いいたします。

●大谷委員

大変よくわかりました。確かに幼小中一貫といった考えが抜けてきてしまうなあと思います。

●鈴木教育長

そこまで、一貫教育だけの成果と言い切れないんですよ。ただ、それは袋井の教育なんです。このスタートは、なぜ一貫教育をやるのってこと。やらなきゃいけないのってずっと言われていた。だから、こういう結果を出すから一貫教育を進めますっていうような議論でここまできている。その点で、袋井の教育の評価、魅力ある学校づくりの評価とはまた少し視点は変わってくる。

●前嶋委員

確かに、今まで小中一貫教育を進める前は、本当に小中一貫教育って大切なのかって思

っていたものが、絶対小中一貫だよ、だって成果は現れるのだからということで進めてきていることは事実であるので、その成果を表す評価なのですね。わかりました。

●鈴木教育長

ある意味で教育に対するいろんな思いを組み込むのですが、最終的に出していくのはあまりにも単純化されているのではないかっていうのですけど、わかりやすくてみんながやってよかったと、あるいは、まだ課題があるねと集約ができるような方向でないと、理解が得られる説明が難しいかなと思う。

●大谷委員

幼稚園の子どもにアンケートをとるって、なかなか難しいですよね。

●前嶋委員

幼稚園の子どもにアンケートというよりも、幼小中一貫なのだから、やはり「幼」では幼稚園が楽しい。幼稚園には不登校はいないです。

●大谷委員

実際にはもしかしたら、幼稚園児とか小学校1年生とか中学1年生の時に、小学校へ上がるのが楽しみですかとか、中学校へ進学することに対して不安よりも期待することの方が多いだとかいうアンケートがとられていて、そういうのが意外に、学力とか不登校とか問題との相関があったりするとわかりやすいと思う。

●上原委員

それって意外と真実だと思う。

●前嶋委員

相関関係があるかもしれません。

●大谷委員

うまくその相関関係が、具体的に、明確的に明らかになってくれば、幼小中一貫教育っていわゆるこういう段差がなくなって、きれいにソフトに自然に上がって、幼小中一貫はすばらしいってなるのかなと教育長の話を聞いて思いました。

●鈴木教育長

例えば、重点指標については目標指標なんです。関連指標については目標はないですが、経年変化は当然追っていきます。ですから、今、大谷委員がおっしゃったような、この関連指標については、毎年変化をグラフなどで見ていく。それを見ていったときに、これが上がっているからこういう結果が出ているんだよねっていうのが、これから積み重ねていって見えてくる。そのための関連指標です。成績が上がった。何をしたから上がったのかを見ていくと、なんだか授業が楽しいという子どもたちが増えているよ、だから、これとこれは関連があるんだねっていう形で、何年かこれを推進していく中で、指標についてももう少し整理がついてくるのかもしれない。進路希望が実現できたというのが最後のアウトカム。そうすると、学力が上がったというのは、中間的なアウトカムになる。最終的に

は、この指標の数値が上がることによって「たくましく次の一歩を踏み出す 15 歳」が増えたということなんですね。これらの指標をどこで区切って、どのように表現するかっていうのは、今日の議論を踏まえてあらためて難しいなと思いました。

●前嶋委員

今みたいなことが表現できると、先が見えてくる。

●上原委員

袋井の一貫教育のスローガンを共有できたらいい。草加市は、「自ら学び、心豊かに、たくましく生きる子ども」をスローガンにしている。すべて、袋井が挙げている目標とオーバーラップしてますよね。草加は、キチンとしたビジョンをもって事細かく進んでいたんだろうなと今思い返しました。そういったようなシンプルなポイントを絞って考えていけば、この目標Ⅰ、Ⅱ、Ⅲの中に一貫教育という意味合いで取り上げるべき重点指標というのは、スムーズに確認できるのではないかと思う。

●前嶋委員

上原委員が言われたのは、教育課題を改善しますとか、この目標Ⅰ、Ⅱ、Ⅲで書いてある言葉のネーミングをもっとわかりやすくするとかということでしょうか。

●上原委員

「自ら学ぶ子ども」という方がわかりやすいですよね。「教育課題」と言ってしまうといっぱいありすぎて困ってしまいます。

●鈴木教育長

以上の意見を参考にしていただいて、また事務局で知恵を絞ってください。

（３）協第 56 号　幼小中一貫教育の推進（教師の特性や専門性を活かした指導）について

●学校教育課長

本件は、１月の民生文教委員会の所管事務調査として提出する内容について協議するものです。今回は幼小中一貫教育の推進の中でも、教師の特性や専門性を活かした指導について説明いたします。

はじめに、中学校教員による小学校への乗り入れ授業を本年度実施してまいりました。成果としては、中学校の教員が小学校の英語、外国語活動をすすめる。本年度からは高南小と袋井南小については、外国語科ということで授業を進めておりますので、実際に中学校の英語の教員が入ることで専門性を伝えることができました。今後、期待される効果としては、その教員が中学校にいますので、現在の６年生が中学校に入学したときに安心して聞きやすい、わかる授業につながればということです。課題としては、中学校の教員は教育学部を出ていれば小学校の免許を持っていますが、他の学部の卒業であると小学校の

免許を持っていないという場合があります。小学校での授業は小学校の免許を持っていないとできないため、小学校の教員がいる授業へ中学校の教員が兼務申請を出して、ＴＴという形で授業を行う手続きを行わないといけないことです。また、小学校は４５分授業、中学校は５０分授業ですので、移動時間を含めて開始時刻を合わせるために日課の変更が必要であること、授業について事前の打ち合わせが必要であることなどが課題としてあります。本年度は袋井南中学校の英語の教員が、毎週木曜日に３時間空き時間を作って、高南小と袋井南小学校に行って英語の指導をしました。

次に、小学校における教科担任制についてですが、義務教育学校や小中学校が隣接するような学校では、実際に中学校の教員が小学校に行き、小学校の教員が中学校に行き、それぞれ足りない教科を補う、または専門的な授業を行うというようなことができますが、本市は施設分離型小中一貫教育のため、中学校の教員は空き時間が少なく、小学校に行って授業をするということが厳しいです。そういうことができるようになると、乗り入れ授業も含めて、教科担任制に近いことができます。今後、外国語科については、県としても、英語の免許を持った者が小学校の中で中心的に授業をすることができるように配慮していくというようにしています。

次に、データの教育的利用について、全国学力・学習状況調査、袋井版学力調査から、来年は今年よりもさらに厳しい予想です。授業改善研修会で、どのようにして授業改善を行い、学力を身に着けさせるか、各学校において、学調の分析から、何が不足しているのか、どこをどのように授業改善したらよいかという改善宣言をまとめています。それを基に、各学校が手当てをしています。人づくりに関しては、５月と 11 月にＱ－Ｕを実施しています。この調査結果で、学級集団が良い方向になった学級は、小中とも全体の７割以上良くなっています。半面、学級運営が大変な学級もあります。このように、さまざまなデータを分析して、指導主事等が手当てをしていくことで、今後課題を改善してまいります。

ＩＣＴの活用状況については、資料を御覧ください。学校現場において活用が進んでいます。デジタル教科書の使用も増えています。校務用パソコンによるデジタル職員室も活用しています。また、校務支援ソフトによる成績処理なども進み、年間で約４０時間程度業務時間が減っています。防災教育として、岩沼市立玉浦中学校と周南中学校が、テレビ電話アプリ「スカイプ」を使って交流をしました。子どもたちが自分にできることは何か話し合いをするなど、防災意識を高めることができています。今後も交流を継続する予定です。

教員の多忙化の現状については、資料のとおり職員が配置されており、各小中学校に対して地域の方々がお手伝いをしていただいている内容も記載しています。また、中学校については、部活動が非常に大きな問題になっていますが、現在 11 名の方が外部指導者として協力いただいています。今後は、学校の部活動をお手伝いしていただける方について

非常勤職員としてお願いできるような方向で要綱等を検討し、対外試合などの引率ができる指導員として配置することで、教職員の働き方改革につなげていきたいと考えています。

［質疑・意見］

●鈴木教育長

ここで協議いただいて、次回の民生文教委員会に提出していきます。

●大谷委員

ＩＣＴの活用について、大きく３つの目的があると思いますが、効果はどうですか。１つ目は教職員の事務の効率化、実際、負担がどの程度軽減されているのか。２つ目は、子どもたちに分かりやすい授業とすることで、実際、学力の向上に効果があるか。３つ目は、ＩＣＴが使える子どもの育成、学校間で差はないか。

●学校教育課長

分かりやすい授業や子どもたちへの成果としては、まず、ＩＣＴを使うと拡大して子どもたちに見せる授業を行うことができ、分かりやすい授業となっています。例えば、立方体の展開などは、紙だと切って組み立てることは何度もできませんが、デジタルでは何回もできて効果的です。また、ワードやエクセルを使用したプレゼンテーションや、修学旅行の報告などを、子どもたちがＩＣＴを駆使して作っています。教師側の成果としては、先ほども申し上げましたが、各担当がそれぞれデータを入力すれば調書が出来上がるので、事務の時間短縮につながっています。

●大谷委員

今のような話を、議員や保護者などにも具体的に説明して、本市が進めているＩＣＴを使った教育は良いということをＰＲしたほうがいいと思います。ＩＣＴ活用に関しては、先生個人に差があるように感じました。

●鈴木教育長

教員の年代による差はあるかもしれませんが、機器が進化しています。不慣れな教員にも簡単に使えるようなソフト開発が進んでいますので、今後ますますＩＣＴによる授業が進むと思います。

本案は、原案のとおり承認することとします。

（４）協第 57 号　平成 30 年度 袋井市立図書館の臨時開館、特別休館及び振替休館について

●袋井図書館長

本件は、平成 30 年度の市立図書館の開館日及び休館日を協議するものです。基本的には祝日は休館としていますが、市内３館の休館日を調整して市民サービスを図っています。

［質疑・意見］
なし
●鈴木教育長
本案は、原案のとおり承認することとします。

【報告事項】

（５）報第 120 号　寄附品　絵本「活人剣の物語」等の受納について

●教育企画課長
資料のとおり、４件の寄附がありましたので報告します。

（６）報第 121 号　袋井駅南地区まちづくり事業メディカル地区における保育所の進出について

●すこやか子ども課長
袋井駅南地区まちづくり事業メディカル地区への保育所の進出について、本市では、待機児童対策としてこれまで法人と様々な協議を重ねてまいりましたが、このたび法人の意向が整いましたので報告いたします。詳細は資料のとおり。

［質疑・意見］
なし

（７）報第 122 号　「英検チャレンジ」事業の開催状況について

●学校教育課長
英検チャレンジ事業の結果について報告いたします。昨年度と開催時期を変更しているため、一概には言えませんが参加者は増えています。
●鈴木教育長
参考までに、今後、高校生が難関大学を受験する場合、最低基準が英検２級となると思われます。大学進学を目指す場合、中学校で３級、高校で２級が基本的なパターンになると思います。

（８）報第 123 号　岩沼市玉浦中学校と周南中学校との交流について

●学校教育課長
資料をお読みください。先ほど、スカイプでの交流の説明をいたしましたので省略させていただきます。

（９）報第 124 号　公益信託西川金一・ゆり子図書助成基金による寄贈品の受納について

●袋井図書館長
　公益信託西川金一・ゆり子図書助成基金より、資料のとおり寄贈がありましたので報告します。児童用図書を中心に、障害者サービス用機器等をいただきました。

（10）報第 125 号　袋井市立公民館条例の廃止について

●生涯学習課長
　資料をお読みください。先ほど説明をいたしましたので省略させていただきます。

７　その他

８　閉会

（午後３時 58 分閉会）